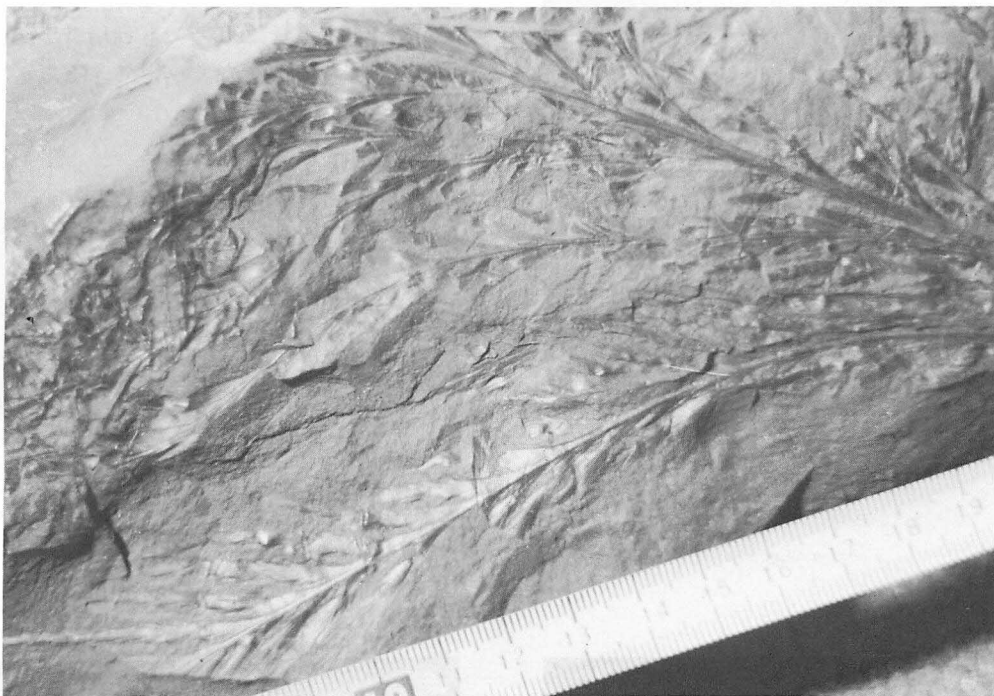


はくさん

第4巻 第4号



オニキオプシス エロンガータ（目附谷産）

白山地域に分布する手取層群中に含まれる植物化石として、これまで表紙で紹介した裸子植物のほかにも多数のシダ植物があげられる。今回紹介するオニキオプシス エロンガータは、その代表的な化石種です。1889年、横山又次郎が新種としたものです。

葉体が細長くのびているのが特徴で、実葉（胞子囊がつくもの）と裸葉（胞子囊がつかないもの）の区別がある。写真は裸葉です。裸葉及び実葉の形状が現生のタチシノブ（オニキウム ヤボニクム）に似ていることから、属名にオニキオプシス、また、種名には、細長いという意味をもつエロンガータという語が用いられている。

現在、タチシノブは日本列島南部、台湾、フィリピン、ジャワ等の暖温帯から熱帯地方に広く分布している。このことから、タチシノブに類似しているオニキオプシス エロンガータが生育した頃（約1億2千万年前）の白山地域は、現在よりも暖かい気候であったと想像できる。

（東野外志男）

アメリカ・ヨセミテ国立公園の施設

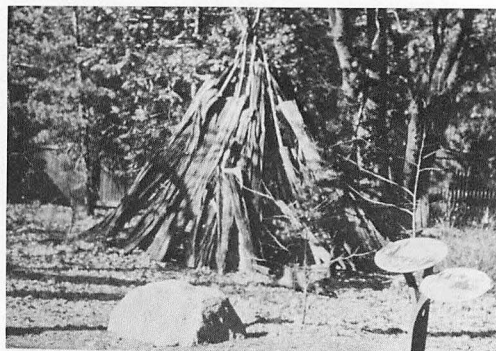


近くの街にある公園の情報サービス施設

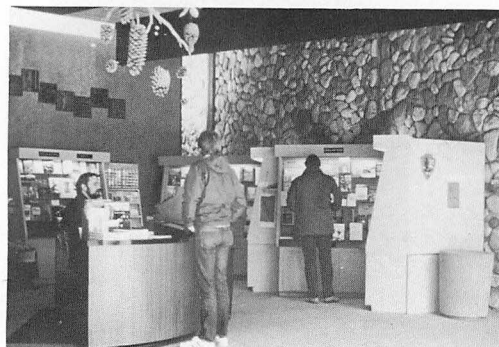
さる2月末、アメリカのモンタナ州で、クマの生態と保護管理をテーマに国際会議が開かれ、当センターから花井技師が出席の機会を得ました。会議のようすは後ほど本誌でも紹介しますが、帰途ヨセミテ国立公園を尋ね、施設など見学することができましたので、それらのうちから2、3お目にかけます。どの施設もよく整備されていて感心させられました。が、年間およそ300万人も利用者があるようですから、なんとなく納得できる気がします。



ビジターセンター



インディアン住居の復原
手前の解説板には要領よく生活が紹介されている。



ガイドコーナーには常にレインジャーが居て案内やアドバイスをしている。後は公園についての出版物



クマ除けを考慮したゴミ捨て

自然のしくみを知ろう

星野 宏 一

「一石二鳥」ということばがあります。この意味は『広辞苑』によりますと、「一つの石を投げて二羽の鳥を殺すこと。一つの行為から同時に二つの利益を得ること。一挙兩得。」となっています。このことばは日常さかんにつかわれています。とくに新聞・テレビ・ラジオではひんぱんにつかわれています。

ある年、私が鳥獣保護行政を担当するようになり、鳥獣保護についていくらかでも考えるようになってからは、この「一石二鳥」ということばがつかえなくなっていました。残酷なことばに思えてならなくなったのです。それからは「一挙兩得」というように心がけていますが、「一石二鳥」と「一挙兩得」ではことばのニュアンスが違うように思えてしょうがありません。しかし、そこは『広辞苑』と信頼せざるを得ません。

「もみじ狩」ということばもあります。私のもみじを觀賞するということだけにしては、捕獲や採集を意味する「狩」ということばをつかうことに、おだやかならざるものを感じて、日本語の中にあるこれら一連のことばを、みんながつかわれないようにならないものと願っています。しかしながら、それらのことばが作られた時代は、自然を保護する必要などはなかった時代、むしろ、人間が生きていくためには、自然にさらに手を加えなければならなかった時代であったでしょう。このような時代には、べつに異とするにたらないことばであったはずです。

最近、日本各地で行われている自然破壊のはげしさは、日本人の自然観についての再検討を必要とするようになりました。多くの人が、日本人の自然愛に疑問を持ち始めています。今まで信じられてきたこと、日本人は自然と同化し、自然を愛好してきた民族であるとの認識は、これは間違いないだろうかとの意見もきかれるようになりました。私もまた、先にあげた二つのことばに代表される人間中心の考え方が、今もなお強く人々の心の中に残っているだけでなく、それがいっそ

う強く広がっているのではないかと心配を抱かざるを得ません。日本人の長所と考えられてきた自然に対する繊細な感覚とは、自然を客観的に認識することのできなかつたことの裏返しではないかとの疑問もまた生じてきています。

私たちが、自然を客観的に把握するのに得意でないことはいつもいわれていることですが、次のことは例にならないでしょうか。日本の照葉樹林帯の森林といえばマツが大部分ですが、そのマツはどのような大きさで成長したかについては、そこに住む人々の多くは理解不十分です。郷土の自然の林はマツ林であると思いこんでいる人がいかに多いことか。シイやタブやヤブツバキなどの常緑広葉樹が郷土の本来の自然であると承知している人々はきわめて少ないのが現実です。

野生動物に餌を与えることが美談とされている現実があります。動機は純粹なのでしょうが、このことのために、その動物の習性に変化を生じさせるおそれがあることまでは考慮していないことが多いといえます。白山自然保護センター周辺の野猿にも、その悪影響が出はじめてるように思われます。

私たちは自然を科学的に認識しなければなりません。それには、植物や鳥の名前を覚えることよりも、それらが集団としてどのような相互関係を形成しているか、人間の行動がその生物社会にどのような影響を与えるおそれがあるのか等の、生態的しくみを理解することの方が自然保護を理解するためにはより重要と考えられますので、当センターも、個々の名前を知らせることはもちろんのことですが、生態的な研究と解説をさらに積極的に進めなければなりません。生物社会のしくみに理解をもつことができるなら、いつか人間も死滅するのではないだろうか、本気で考えなければならないほどの、この自然破壊をどうにか食い止めることも夢ではないと思っています。

〈白山自然保護センター所長〉

白山にこと寄せて

半田賢龍

白山に思を馳せるとき、私の心には「しらやま」に越の大徳泰澄大師が二重写しになり、菊理媛、十一面観音、朝鮮文化へと、白い道への憧憬が涌出てならない。

それは、私の生れた石川郡美川町手取部落には、泰澄大師の開基と伝えられる天台宗萬福寺の跡があることと深くかかわっているのである。曾祖父は村長生活を離れてからは、部落の有志達と共同調査をして、部落内の地名で「てらまえ」と呼ばれる田圃の一角に「白山権現堂別所御跡」と大きく刻んだ碑を、大正8年3月に建立した。そのためか、私は幼時、信仰深い祖母や父母から、日常茶飯事の如く、繰返し聞かされたのは、次の話であった。

泰澄大師様は白山を開かれた尊い方であるが、この方が養老2年、白山を下山されて、この土地に立ち寄られたとき、この地は、白山の西正面に当り、白山の容姿も秀麗であり、また飲み水も清く、おいしいからと、この地に一堂を建立なされたのが萬福寺で、その後、親鸞様（御開山様という）が越後に赴く途中、この地に来られたとき、たまたま比叡河（＝手取川）が氾濫して渡れなかったので、数日をこの寺に仮宿された。その時、住僧は深く親鸞様の人格に尊崇し、天台宗から脱して、真宗に入り、寺号も萬法寺と改めた。しかしこの寺も、屢々の比叡河の水害に耐えられず、越前の今立郡神明村字鳥羽に移転してしもうたのである。

確かに、朝に夕にこの土地から仰ぎ見る白山は、やさしく、美しく、気高い、「菊理媛」の姿そのものである。私には永遠に恋こがれる乙女の姿にみえてならないが、これは私一人の合点ではなく、この土地に住むすべての人々の心でもあろう。広瀬誠氏は『立山と白

山』の著書の中で、「永遠に女性なる山」という気がしてならないと記している。

私は長らく植物生態学に、更に最近は水文学にも深い興味を寄せているが、白山は「緑」、「水」、「土」と「信仰」のあやなすコスモスの思想として私の心に大きく形成されようとしている。

白山ということばについては諸説を見るが、作家金達寿氏は『日本の中の朝鮮文化』の中で、

「だいたい、われわれはいまこれを『はくさん（白山）』とよんでいるけれども、もともとの名は『はくさん』でなかったことはもちろん、『しろやま』というのでもなく、『しらやま』というのがほんとうの呼び名なのである。……日本音では白の音はハク、訓はシロだが、韓国では音でヒダである。白山神社が帰化人と関係深いことは、かなり傍証がある。元来、白山神社は古くから芸能者によって信仰された神社であった。古代、中世の芸能者は、巫女の流れをひくものと、下級の帰化の系譜をひくものがあつたらしく、賤民である白丁と関係があるものだという。」

と記しているが、いろいろと白山々麓地帯の芸能文化と考え合せて興味深いが、ここでは詳論を控えたい。次に「白」についての日本古代色彩史についてであるが、日本の古代の色の基調をなす色は、黒、青、赤で、白は欠落している。上原和氏の『古代日本の美と呪術』から白についての一部を引用しよう。

「ヤマト朝廷では、どうやら7世紀の中頃から、白い色がつよく意識されはじめてきます。それは色彩感覚というよりは開明思想からきております。ご承知のように大化6年に年号が白雉と改元されました。……このとき

穴戸国から白い雉がみづかり宮中に献じられたのを、唐から帰朝した僧旻らの献言をいれて瑞祥として改元することになるわけです。……新羅では白い色が神聖視されてきていた。たとえば聖なる山川には太白山、白頭山、白岳、白山、白馬江というふうにながります。日本にある白山信仰が新羅から伝えられたものであることはよく知られていることです。白という色は新羅では太陽の光をあらわしているといわれております。聖なる光です。ですから白は清明、清浄をあらわします。」

後述する菊理媛の「くくり」のイメージと白は全く合致する。泰澄大師に言及しよう。佐和隆研氏は『日本密教』の「山嶽信仰の美術」の項で、泰澄は高麗から亡命、帰化した三神安方の子で、白鳳11年に生まれ、純粋な山岳信仰から始まる白山信仰は古い時代に起源をもつが、ここに仏教信仰が結びついたのは泰澄が登山してからであるとしている。福井県福井市三十八社町の大師の誕生地である泰澄寺奉賛会発行の冊子『泰澄大師』によると、父は三神安角と云われ、此の辺一帯を領有し、浅水川を上下する舟の支配をしていたし、母は勝山市毛屋出身であり、彼が11歳のとき道昭が彼の家に宿泊したとき、普通の子供とは違ってどことなしに仏の相を備えているのに驚き両親に「この子は普通の子供とは違います。仏童に違いありません。注意してよくお育てになるときと立派な人になるでしょう。」と云っている。この道昭はよく知られた飛鳥、奈良時代を代表する名僧の1人だが、わが国における法相宗の祖とされ白雉4年に唐に渡り玄奘三蔵に師事した。百済系の渡来氏族の出身で、土木技術の知識を身につけていたという。また弟子といわれる行基も後年泰澄に会っている。道昭(629~700)~行基(668~749)~泰澄(682~767)の系譜は渡来氏族の系譜と考えられるが、渡来氏族論への深入りはさけることにしよう。しか

し、泰澄たちと継体天皇の系譜とのかかわりあいはどうとらえられるのだろうか、私の疑問と興味の一つはここにある。

五来重氏は『高野聖』で、庶民大衆の要求する素朴な原始呪術を仏教や道教で、権威づけなければならないその作業に泰澄は十一面観音呪法をおこなったとしている。十一面経や十一面神呪心経の写経は、はじめてみえるのは、速水侑氏の『観音信仰』によると天平5年と9年である。白山曼荼羅については『白峰村史』下巻口絵写真版で色刷白山垂迹図があり、村山修一氏は『本地垂迹』で、白山は平安朝より修験霊場として聞え、泰澄の開くところ、白山妙理権現大菩薩(本地十一面観音)を中央の禅定峯で、別山大行事(本地聖観音)を南の峯で大巳貴(本地阿弥陀如来)を北の峯で感得したと伝え、麓には権現7社である白山本宮、佐羅、別宮、岩本、金剣、三ノ宮がまつられた。本宮である白山比咩神社には菊理姫神、伊弉諾神、伊弉冉神の三神をまつり、平安末より天台の影響をうけて、上、中、下社の21社に発展した。醍醐寺所蔵室町末の1本は上方に白山三峰を出し、それぞれの峰の上と下に蓮華座に乗った円相を置き、それより下方にかけて白山7社と撰末社の祭神垂迹形を10本描き、その下に眷属を小さく2体、最下方滝を背景にした泰澄上人など像を2~3描く。白山比咩神社所蔵本も同期の作、上端3つの円相中に3社本地の種子を入れ、捲簾幔幕の下に垂迹形の3神、中央本宮と左の三宮は唐装団扇を把る女形、右の金剣宮は隨身風男形、おのおの3曲屏風を背にする。下方高欄のきわに狛犬1対、正面に階段を設ける。品位の高い作で大阿闍梨夷運が開眼した旨の墨書銘がある。白山比咩神社については『白山比咩神社叢書』全8輯が詳しいが、ここには取り上げない。

十一面観音は、私が現在、最も心惹かれていた観音であるが、白州正子氏は『十一面観

音巡礼』の「白山比咩の幻像」の項で美濃側の日吉神社の十一面観音を中心に述べ、「十一面観音は、たしかに仏教の仏には違いないが、ある時は白山比咩、またあるときは天照大神、場合によっては悪魔にも龍神にも、山川草木にまで成りかねない。そういう意味では、八百万の神々の再来、もしくは集約されたものと見ることも出来よう。」と結んでいる。

中国では6世紀から7世紀にかけて、続々と観音関係の独立した経典が漢訳され、その最初が十一面観音に関する経典である。570年頃、耶舎崛多によって漢訳された『仏説十一面観世音神呪経』がそれである。本面の頭上に十面の化仏をつけるこの観音は、10種の功德と4種の果報を授けるといふ誓願をもつものである。上原昭一氏は『かんのんみち』で後藤大用氏の『観世音菩薩の研究』から『神呪経』の所説に基づき11億の諸仏を代表する意味での十一面であると説くことが卒直であり、かつ信仰的でもあって何人にも首肯しうように思うとの考に賛同し、更に形象的にはインド古代のバラモン教における十一荒神に源流があるうとしている。

井上靖氏は彼の作品の一つの中で、琵琶湖の周辺の十一面観音にその素材を求めているが、平凡社ギャラリー3『十一面観音』の中で氏は次のように述べている。

「……以前から、仏像の中で、特に十一面観音像に心を惹かれていたが、改めて十一面観音像に焦点をしぼって、次々に十一面観音の前に立ってみると、名品は名品で、地方造りは地方造りで、優れたものは優れたもので、素朴なものは素朴なもので、何とも云えない魅力を覚えてくる。十一面観音像というものは、美術品であると共に信仰の対象として存在しているものである。美しいと判断する基準の中には、当然、尊いとか、きよらかだとかいう宗教的要素もはいつている。単に美しいだけの十一面観音像といったものはない。

その美しさの中には、信仰の対象としての、
拝まれるものとしての生命がはいつているの
である。」

私の十一面観音への心も全く氏と心を同一にする。手取川も川口近い下流域に「夏の水」「柳原の清水」信仰の川としての安産川「蓮池観音」など水にかかわる信仰が多いが、いづれも泰澄と十一面観音との深いかかわりの観点からみると理解しやすいように思う。

白山の祭神菊理媛について、私は幼少の頃、母から韓国の神様だと聞かされたことが心に深く印象づけられているが、五来重氏は『地獄と人間』の中で、

「白山の菊理媛というのは伊弉諾尊が黄泉の国へ行って、穢れを背負ってきた。それで日向の小門の櫛原という所で禊をした。その禊をしたときに生まれた神さまということになっております。菊理というのは、「くくる」で、「水くくる」、すなわち水にもぐることとして、水にもぐって死者の穢れの禊をしてくれる神さまという意味なんですから、どちらもあの世とこの世とを境する神、これが白山の神さまなんです。これを白山の修験道のほうでは、妙理権現、あるいは妙理大菩薩とも十一面観音ともいっておりました。」と記している。私は先に、私の心のなかに一つのコスモスの思想が形成されつつあることを述べたが、白山一帯の「緑」の思想は生態系の思想であり、現在、私の心を大きくゆすっている大楽金剛不空真実三昧耶経、般若波羅密多理趣品の曼荼羅の世界と重なって感じられてしょうがない。立川流的な解釈とは別な自己流の解釈を試みつつある。また菊理媛の神話の中に、水文学に於ける、白山山系、手取川、加賀平野、日本海を一環とする水循環と汚染水質機構の論理を追い求める今日この頃である。いずれかの機会に、以上に羅列したことごとについて、自分なりの考えをまとめてみたいと思っている。(石川植物の会会員)

植物の四季 4

雪と植物

四手井 英 一

北陸は大変雪が多い。一年の半分は雪の中にうもれてしまう。小さな木や草は押しつぶされ、大きな木も頭を深くさげている。時々耐えかねた木が悲鳴をあげ、雪煙をあげて倒れてくる。湿った重い雪の力には何物も逆らうこともできず、ただひたすら春の訪れを待っている。

はるかな過去から生き続けてきた植物たちは、その長い過程の内に、雪への逆らいをやめ、自らを変え、雪に従うことによって、やっと生存を許された。低く細く、できる限り雪に逆らわない形になったユキツバキ、ヒメアオキ、エゾユズリハなどや、地を這う形になったハイヌガヤ、チャボガヤ、ハイヌツゲなど。また草の多くは地上から姿を消し、ユリの仲間のように球根などの形で長い冬を越す。

それぞれの植物が、それぞれの形で、それぞれに合った場所で、厳しい自然と美事な調和を保って生きている。その調和が少しでも

くずれると、もう元の姿にもどるまでに数百年もの長い時を必要とするだろう。

〈研究普及課〉



32) ヒメアオキ
Aucuba japonica THUNB. var. *borealis* MIYABE et KUDO in Trans. Sapporo Nat. Hist. 5 : 42 (1913) — *A. japonica* var. *pygmaea* SIEB. ex CARR. — *A. japonica* subsp. *borealis* SUGIMOTO

本州（関東以西）・四国・九州に分布するアオキ（図の2）にくらべると、小型で、若枝や葉柄等に有毛という点で区別できる。また、果実の先端が、やや、ひょうたん型にくびれる傾向がある点も見がせない。このようなアオキとの間に見られる相違点も、多くの個体をみる時には、各様の中間型があり、実際、同定に迷うようなことを経験するが分布域（北海道・本州の日本海側）からヒメアオキと断定していることが、しばしばある。

里見（1975）北陸植物図譜より

魂の入れ替り

石野春夫

むかし、むかし、日向の国（宮崎県）の人と伊勢の国（三重県）の人が白山禪定（昔は白山の神様へお参りするために登山することを禪定と言いました）の帰り道、白山本宮に近い白山村の住吉神社に立ち寄り、お参りをして社殿の横の岩の上で一休みしておりました。二人共疲れていたのです、ごろりと横になると岩の冷たさと木陰の涼しさに気持よくなり、ぐっすりと寝込んでしまいました。

ぐっすりと昼寝をしている二人の鼻の穴から、それぞれ一羽のハチが飛び出して近くの木の枝にとまったりして遊んでいましたが、やがて鼻の穴の中へと戻って行きました。しかし二羽のハチは出て来たときは反対に鼻の穴を間違えて日向の国の人の鼻の穴から出たハチは伊勢の国の人の鼻の穴へ、伊勢の国の人の鼻の穴から出たハチは日向の国の人の鼻の穴へと入ってしまいました。

ハチが鼻の穴へ入って行くと二人共「ウウーン」と目をさました。二人の魂がハチに化けて遊んでいて入る人の鼻の穴を間違えて魂が入れ替ってしまったのです。

魂が入れ替ったことを二人共気付いていませんから、そのままお互に別れをつけて故郷へと帰って行きました。魂が入れ替っているのです日向の国の人には伊勢の国へ、伊勢の国の人には日向の国へと帰って行ったのです。

日向の国へ帰った伊勢の国の人の体は、永かった旅もこれで終りだと喜び勇んで「ただいまー」と家の中へ入って行くと、家の中にいた人達は不思議な顔をして「あなたはどこ

のか」と尋ねました。

「わしはこの家の主人だぞ、ばかにするな、白山禪定から今帰ったのだ」と言っても誰も信用してくれません。気違いあつかいされて追い出されてしまいました。

一方、伊勢の国へ帰った日向の国の人の体も同じことで、「ただいまー」と家の中へ入っていくと、「お前はどこの人だ」と問われていくら主人だと説明しても顔が違っているものですから信用してもらえず追い出されてしまいました。

伊勢の国へ行った日向の国の人も、日向の国へ行った伊勢の人も、自分がどうなったのやらさっぱり判らず二人共「山で道づれになって白山村の住吉神社で別れた男に聞いたら判るかも知れない」と考えて、またも、はるばると遠い遠い加賀の国まで引き返して来ました。

住吉神社でばったりと顔を合せた二人は、やれ嬉しやと、お互に家を追い出されたことを話し、これからどうしようかと相談し合いましたが良い智恵も浮ばず、考え込んでいるうちに二人は疲れが出て来てごろりと岩の上に横になってぐっすりと眠りこんでしまいました。

昼寝をしている二人の鼻の穴からは前のときと同じように魂がハチになって飛び出してしばらく遊んでおりましたが、互に反対の人の鼻へと戻って行きました。魂は元の体へもどったのですが眠りからさめた二人はそんなことは全然知りません。二人で「どうしよう」

とまたまた相談をしましたが、国へ帰っても家の者から気遣いあつかいされるのが嫌だということで、この加賀の国の白山のふもとに住みつことにきめました。

二人は人が一人も住んでいない瀬切野（鳥越村字瀬木野）へ住みついて、ここで一生を送ったということです。日向の国の人の子供が白山へ登ると言って家を出たまま帰らない父親を探して住吉神社迄来たところ、神主を

している父親とめぐり合うことが出来ていっしょに瀬切野に住みついてしまいました。

今でも瀬木野にはこの三人の墓があるようですが誰も知っている人はありません。住吉神社の跡は、国道157号線から20 m程手取川の方へ寄った所で岩の上に近年立派な石碑が建てられました。

（『加賀志徴』より）

〈石川郡鶴来町〉



イラスト 石川 太郎

イヌワシの棲む山 一高三郎山一

上馬康生

金沢市街を流れる犀川の源流地域は、奈良岳（1644 m）を最高峰として、見越山や大門山など 1500 m 前後の山々が連なっているところです。山の好きな一部の登山者を除くと訪れる人も少なく、自然のよく残されている白山山系の中でも、特に豊かな自然に接することができる地域です。

高三郎山（1421 m）もそのような山々の中の 1 つです。金沢市の水源の犀川ダムへ行くと、ダム湖をとり囲む山並みの一番奥に、頂上部をのぞかせたこの山を見ることができます。1 年中様々な自然の姿を見せてくれますが、特にタニウツギの花がダム周辺の道沿いを色どる 5 月中旬がこの山の最も美しい季節です。急な登山道を登っていくと、足もとには方々にイワウチワやショウジョウバカマが咲き、まだ芽吹き出したばかりの明るいブナ林に、タムシバやオオカメノキの白い花が目立ちます。なかでも残雪を背景にして岩の尾根筋に咲くシャクナゲの赤桃色の花は最も印象深いものです。山頂からは金沢平野や砺波平野、白山まで続く山並みなどが見渡せ、天候に恵まれると遠く北アルプスの連峰まで見ることができます。

この高三郎山にイヌワシの営巣地が見つかったのは昭和 49 年の 5 月のことでした。鳥の調査のため冬期を除き毎月登っている私は、その年初めての調査を終え帰路を急いでいる時、何げなく見上げた上空をよぎる黒い影に引きつけられたのです。その影はやがて稜線の木に降り、次に飛び立った時にはその枝をつかんでいたのです。「巣がある」そう直感した私はすぐその後を追いました。やがて岩はだが目立つ急斜面の一角にその影は姿を消しました。後日その岩場に、すでに親鳥と同じくらいの大きさに成長した雛の姿を、望遠鏡の視野の中に認めた時の胸の高なりを今も忘れることができません。

イヌワシは全身が暗褐色の大型のワシで、わが国に棲む陸の鳥では最大の鳥で翼を広げると 2 m にも達します。全国的にも非常に数

が少なく、兵庫県、岩手県など数県から繁殖が知られているだけです。県内では、今までに同じ犀川上流の見定地区と小松市滝ヶ原の三童子山に営巣地が知られていますが、どちらもすでに 20 年以上繁殖の記録はありません。昭和 40 年に石川県の鳥に指定されながら、繁殖地はおろか姿さえ見る機会が少なくなっていたのです。ノウサギやヤマドリを捕食するこの鳥に必要なナワバリの面積は非常に広く、しかも極度に人間を嫌うため、どうしても山深い自然のよく残されたところにしか棲めないのです。最近では砂防工事や林道工事イヌワシの棲める環境はますます減る一方です。

数が少なく、その生息環境が人を寄せつけないところであることに付け加え、巣作りから雛の巣立ちまでに約半年もかかることから、イヌワシについてはまだまだわからないことばかりです。発見した年には雛は無事巣立ちましたが、その後 2 年間同じ巣での繁殖は行なっていません。ナワバリ内に 2～3 ケ所の巣を持っていて、そのうちの 1 つが使われるともいわれるので、どこか別のところに巣が見つかるかも知れません。また巣立った雛はまだこの地域に残っているので、その行く先にも興味があります。時間ばかりかかり、姿を見ることさえもなかなかできず調査は一向に進みませんが、これからも彼らの姿を求めて山行を続けていくつもりです。

〈研究普及課〉



山日記

千村勝哉

毎年一回、国立公園管理員が参席して行なわれるブロック会議がある。今年は全国4ブロックに分かれ、そのうちの南関東、中部ブロック会議が神奈川県箱根で行なわれ出席した。

席上では各地区から持ち込みの、さまざまな問題が提議され、討論される。保護と開発の問題、管理体制、利用面、業務面等々。問題は多く、議論は尽きず、難しさだけが浮かび上がってしまう。これは、国立公園の指定方式が地域性公園と言って、土地所有や産業用途に関係なく、ふさわしい所であれば指定されているため、自然保護や適正な利用のあり方をめぐって、産業との間に摩擦が生じてくるからである。

国土面積の割に人口密度が高く、平野部も少ないので、かなりの辺地にも生活圏、産業圏が広がっているため、どうしても農林業、漁業、居住等の地域と公園が併用されることになる。

このような場合、管理面の難しさもさることながら、利用面でも然りであり、多様性が見られる。

利用と言えば、ブロック会議のあと、公園内にある最近はやりがけのフィールドアスレチックを体験する機会を得た。丸太とロープの組み合わせによる、林の中の素朴な運動コースは、忘れかけている平衡感覚、スリル、勇断性等を呼び戻してくれ、全身運動の爽快さを与えてくれた。国立公園の利用施設とは、風致を損なわない範囲で、人間と自然との交流を計ることを手助ける媒介手段として考えられているから、アスレチックの場合は運動そのものの目的性が高いので、登山道や山小屋等とは性格的にちょっと違うものではないかと思う。しかし、コース施設を密集型でなく、例えば自然研究路的要素を導入すればかなり趣きが違うものになるろう。

また、最近のもう一つの体験は、志賀高原のあるスキー学校でラングラウフの初歩レッスンを受けたことである。いわゆる距離競技用スキーで雪の山野を彷徨するのである。競技でない場合は少し太巾のスキーを使う。これは文句なしに楽しい。歩いたり、走ったり、時には滑り、途中、休みながら雪の風物詩をじっくり楽しむ訳で、スキーも軽く、爽快そのもの。ゲレンデスキーと違って空間も変化に富み、無限である。このようなレッスンを行なっている所は他のスキー場にも10校ほどある。西ドイツやノルウェーあたりでは大変なブームのようである。

公園内での利用手段は、今後も種々考え出されようが、淘汰されずに最後まで残るのは、人間本来の生理にマッチしたものであろう。つまり、健康的範疇での身体の運動、探求、快感、遊び、孤独、緊張等の人間の欲求を満たしてくれるものである。国立公園地域はそうしたものを得ることが出来る高質な場であると言える。それだけにその利用方法の選択は慎重でなければならない。

〈白山国立公園管理員事務所〉

たより

各地に大きな雪害をもたらし、県民にとって大きな負担となった降雪は、3月初旬にも降り続けました。一時はどうなることやらと一同心配しましたが、ようよう此頃一段落したようで、センターの冬期事務所がある市原にも、春めいた陽気が漂いはいはじめております。

しかしながら、この陽気で、いままでしまっていた根雪がとけはじめ、山に至る道路のあちこちで雪崩の危険が出はじめています。

さて当センターでは、春を迎えていくつかの行事を計画しています。

- 3月26日(土) 金沢市社会教育センター講堂において13時30分より「白山の開発と保護に関するシンポジウム——山村の暮らしを守るためにはどうすれば良いか——」というテーマで4名の講師のかたのお話しを中心に、討論会を開催します。ふるって御参会下さい。

講師の方は以下のとおりです。

- 織田英二(石川県白峰村長)
- 木村久吉(石川県自然保護協会会長)
- 四手井綱英(日本モンキーセンター所長)
- 千葉徳爾(筑波大学教授)

- 4月17日(日) 恒例の春の自然観察会を鶴来町周辺で催します。今回は、「春の植物」をテーマに、春の草花を探勝したり、山菜採りに興じたり盛りだくさんの楽しいスケジュールを考えております。当日は、加賀一宮駅に9時30分集合になっておりますので、事前に当センターに、御申し込みの上、ごぞって御参加下さい。

なお、当センターの電話番号は(076195) 5132です。

目次

| | | |
|-------------------|-------|----|
| 化石 オニキオプシス エロンガータ | 東野外志男 | 1 |
| アメリカ・ヨセミテ国立公園の施設 | 編集部 | 2 |
| 自然のしくみを知ろう | 星野 宏 | 3 |
| 白山にこと寄せて | 半田 賢龍 | 4 |
| 植物の四季(4) | 四手井英一 | 7 |
| 白山の民話(6) 魂の入れ替り | 石野 春夫 | 8 |
| イヌワシの棲む山 一高三郎山一 | 上馬 康生 | 10 |
| 山日記 | 千村 勝哉 | 11 |

はくさん 第4巻 第4号

発行日 1977年3月21日
発行所 石川県白山自然保護センター
石川県吉野谷村中宮
印刷所 株式会社 橋本 確文堂